

## 第 4 章

### 高等部の研究

# 高等部

## I これまでの研究成果

- 1 授業につながる個別の指導計画
  - 1-1 実態把握からの目標設定
  - 1-2 授業の目標・支援の設定
- 2 個別の指導計画につながる授業の評価
  - 2-1 授業の評価
  - 2-2 評価のフィードバック

## II 実践報告

- 実践報告6 「窯芸班の実践」
- 実践報告7 「農園芸班の実践」
- 実践報告8 「手工芸班の実践」

## III 研究のまとめ

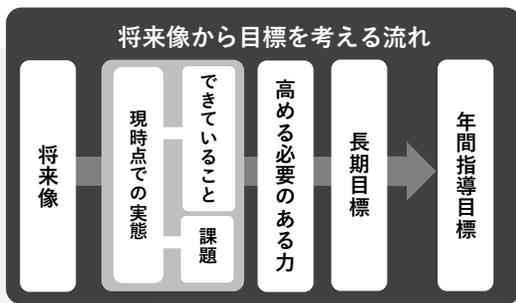
- 1 研究の成果
  - 1-1 将来像と整合性の取れた適切な目標設定について
  - 1-2 適切な支援の設定について
  - 1-3 「支援計画シート」について
  - 1-4 評価とフィードバックの方法について
- 2 今後の課題
  - 2-1 将来像と整合性の取れた適切な目標設定についての課題
  - 2-2 適切な支援の設定についての課題
  - 2-3 「支援計画シート」についての課題
  - 2-4 評価とフィードバックの方法
  - 2-5 指導者の先生から

## IV 資料

- 資料1 年間指導目標設定のためのワークシート
- 資料2 将来像の実現に向けたアンケート
- 資料3 子どもの未来予想図
- 資料4 支援計画シート・評価分析シート

# Plan

実態把握・目標設定



本人・保護者

子どもの未来予想図

担任・授業担当・学部職員

個別の指導計画 前期

指導場面別 授業計画 前期

学部会 検討・共有

担任

将来像シート

個別の指導計画 年間①

年間目標設定シート

個別の指導計画 年間②

担任・授業担当 学部職員

学部会 検討・共有

本人・保護者 担任

個別面談 検討・共有

担任・授業担当

個別の指導計画 前期

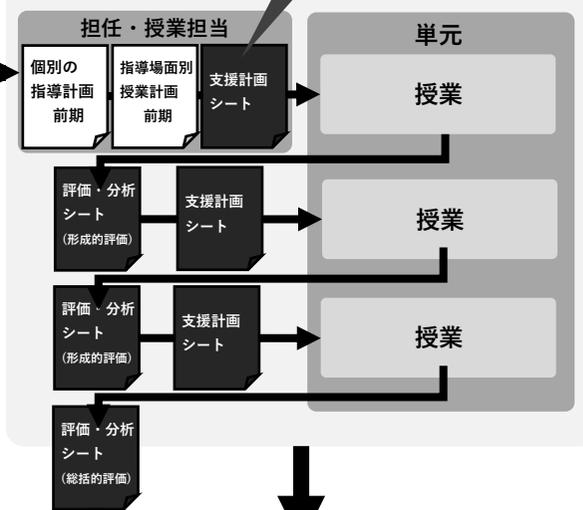
指導場面別 授業計画 前期

個別の指導計画 後期

指導場面「別」 授業計画

# Do

授業実践



# Action

フィードバック

担任

- 将来像の見直し・修正
- 年間①(実態)の修正
- 後期の目標の作成

個別の指導計画 年間①

本人・保護者 担任

個別面談 検討・共有

担任

- 将来像の現実化(追加)
- 年間①(実態)の修正
- 次年度の長期目標の修正

個別の指導計画 年間①

本人・保護者 担任

子どもの未来予想図

個別面談 検討・共有

# Check

評価

担任・授業担当 学部職員

学部会 検討・共有

担任・授業担当

個別の指導計画 前期評価

各教科・指導場面の評価

評価・分析シート (総括的評価)

担任・授業担当

個別の指導計画 後期評価

各教科・指導場面の評価

高等部のPDCAの流れ

# I これまでの研究成果

## 1 授業につながる個別の指導計画

### 1-1 実態把握からの目標設定

本研究開始時点で「実態把握からの目標設定」の段階で、高等部が課題としていたのは、「長期目標から授業の目標までの整合性」と、「授業における適切な手立て」の設定であった。



図1 実態把握から目標設定の流れ

高等部では、図1で示した流れに沿って長期目標・年間指導目標を設定する。設定にあたっては、本人・保護者が描く「子どもの未来予想図」（資料4）に基づき、担任が「将来像」を作成するとともに、「個

別の指導計画 年間①」（以降 年間①）に生徒の実態を記録する。その「将来像」と「年間①」をもとに「年間指導目標設定のためのワークシート」（資料1）を用いて、23～25歳までにどのような力を高める必要があるのかを考え、目標設定を行う。

この目標設定の段階で重要だと考えられたのが、視点の共通理解である。本研究では、課題であった「長期目標から授業の目標までの整合性」について、ワークシートの各項目や流れの捉え方を再度検討し、学部職員で視点の共通理解を深めた。視点の共通理解が深まったことで、ワークシートを用いて、長期目標と年間指導目標とのつながりを明確にし、各学年でどのような姿を目指すのか、段階的に目標を考え、長期目標と年間指導目標の整合性を高めることができた。

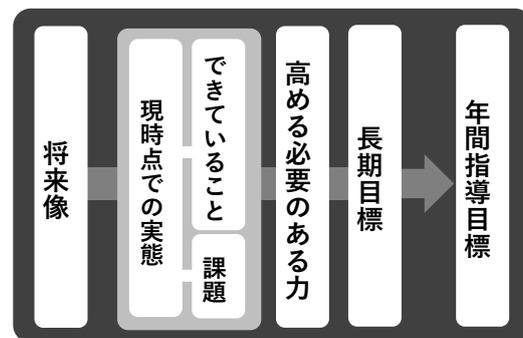


図2 将来像から目標を考える流れ

表1 「強み」と「弱み」、「配慮事項」の分類

記述する際の共通理解
・「〇〇(支援)すると、～できる。」「〇〇(場面、状況、相手)では、～できる。」など、手立てに活かせる実態を具体的に記述する。また、できるようになったことについては、その指導経緯を記述する。
「強み」「弱み」「配慮事項」
・生徒の個人内差における強みを「○」、弱みを「◇」として表記する。その他の内容は「・」で表記する。 ・健康上及び障害特性による配慮事項(目標立てして取り組むべきことではないこと)を「*」で表記する。身体に関わることは、家庭を通し、医療的な診断について確認した上で、記述する。

さらに、「授業における適切な手立ての設定」という課題については、「年間①」に実態を記述する際に、指導の手立てに活かせるように、これまでの指導経緯、困難の理由、どういった手立てがあればいいのかといったことを分析的に記述することとした。このことにより、授業づくりに活用する際に必要な情報が読み取りやすく、生徒の実態を確認しやすくなると考えた（表1）。

### 1-2 授業の目標・支援の設定

年間指導目標に基づき、各指導場面の前後期の目標を設定する過程を図3で示した。担任が考えた目標を学部教員が検討することで、より客観性と妥当性を高められるようにしている。さらに、各指導形態の目標を設定する際には、本人・保護者による家庭の様子や将来の希望などをまとめた「将来像実現に向けたアンケート」（資料3）の内容を踏まえて、学習内容を検討している。

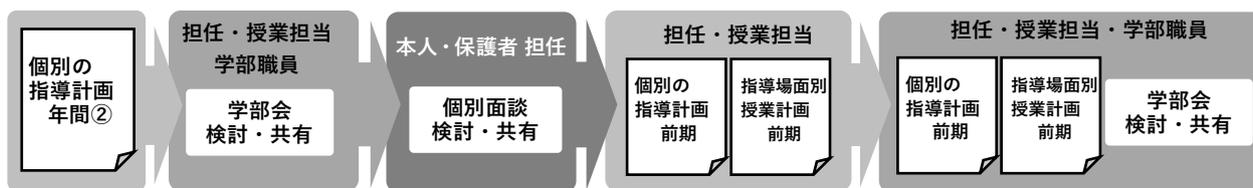


図3 年間指導目標から前後期の目標を設定する過程

そして、前後期の目標から授業の目標や手立てを考える段階では、「支援計画シート」（資料2）を活用する。「支援計画シート」は、前後期の目標の達成に向けて、その授業の学習内容に対する生徒のつまずきとその要因を検討し、「年間①」で整理された「強み」「弱み」を踏まえてどのような支援を行うかを考える過程を明確化するものである（図4）。この「支援計画シート」を活用することで、より個々の特性を踏まえた指導・支援が可能となり、さらにその指導形態・単元における具体的な姿を想定することで授業担当者同士の共通理解を一層進めるためのツールとしても有効だと考えられた。



図4 指導計画と授業をつなぐ支援計画シートの役割

## 2 個別の指導計画につながる授業の評価

### 2-1 授業の評価

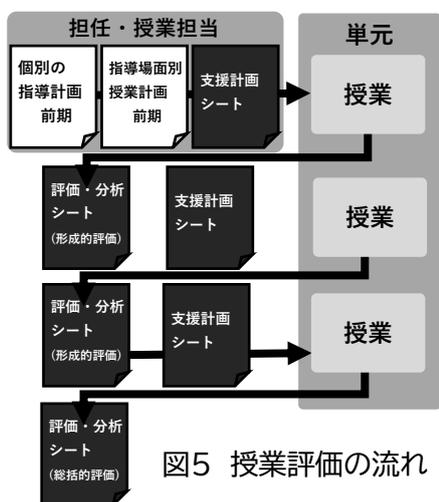


図5 授業評価の流れ

総括的評価を毎授業の形成的評価の積み重ねとして捉え、形成的評価を記録し、次の授業や単元における支援につなげるために「評価分析シート」（資料2）を用いて授業の評価を行った。その際には、生徒の学習評価に基づき教員の指導の評価が行えるように、学習評価を「評価」とし、指導の評価を「分析」として記述することとした。「支援計画シート」を基に個に応じた支援を計画し、「評価分析シート」を用いた学習評価・指導の評価を次の「支援計画シート」の作成へとつなげる過程を、単元の中で、また単元を越えて実施することで、段階的に前後期の目標に迫り、その時々を生徒の実態に合わせた指導・支援ができると考えている。

### 2-2 評価のフィードバック

「評価分析シート」を用いることで、各授業の中での生徒の成長や力の伸び、変化をより細かく捉えた形成的評価が可能となり、次時や次単元の計画を行う際に、より実態に則した指導・支援を実施することができる。また、具体的な形成的評価に基づいて単元・学期の総括的評価を行うことで、目標に対する到達度がより明確になり、その評価を、個別の指導計画のPDCAサイクルや各授業の段階にフィードバックすることができるようになり、生徒の実態に則した授業づくりが行えると考えた。